九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

せめぎ合う霊力 : ケニア海岸地方ドゥルマにおけるキリスト教徒達の語り

岡本, 圭史

https://hdl.handle.net/2324/1806793

出版情報：九州大学, 2016, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式３）

氏　　名　：岡本圭史

論 文 名　：せめぎ合う霊力――ケニア海岸地方ドゥルマにおけるキリスト教徒達の語り

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本研究の目的は、ケニア海岸地方に住むドゥルマ（Duruma）の人々についての民族誌的記述を通じて、キリスト教への改宗過程を捉えるための、より適切な視座を開拓することである。妖術や憑依霊をめぐるキリスト教徒達の語りを主な資料として、キリスト教徒となる過程がドゥルマ自身にとってどのような意味を持つかという点を明らかにする。更に、キリスト教への改宗過程を捉えるための方法上の問題についても検討を加える。本研究の対象とするドゥルマの間では、妖術（utsai）を用いて身近な人々を攻撃する妖術使い（mutsai, pl. atsai）が村の中に住んでいるとされる。妖術使いに加えて、様々な種類の憑依霊もまた、彼等を攻撃するとドゥルマは語る。憑依霊はペポ（pepo）あるいはニャマ（nyama）、シェタニ（shetani）等と呼ばれ、更に様々な種類の霊がその中に含まれる。こうした目に見えない脅威への対処が、ドゥルマにとっては重要な課題となっている。妖術や憑依霊に対処する最も一般的な方法が、専門の施術師（muganga, pl. aganga）による各種の施術（uganga）である。他方、近年のドゥルマの間では、施術の代替案としてのキリスト教もまた人気を集めている。

序論においては、ドゥルマの紹介に続けて、アフリカ妖術研究と改宗研究の交差する位置に、改宗過程を捉えるより歪みの少ない視座の開拓という、本研究の課題を位置付ける。第 1 章及び第 2 章において、妖術や憑依霊がドゥルマにとっての実在する脅威であることを示す。これらの 2 つの章において指摘されるのは、妖術使いが身近な隣人達の中に紛れ込んでいるとされることと共に、相互の屋敷の訪問や客人への水の提供、少額の現金の授受といったごく一般的な行動が妖術の行使と結びつけられるという点である。第 3 章においては、改宗概念並びに宗教概念に焦点を合わせた上で、妖術とキリスト教の関係を捉える際に考慮が必要となる方法上の問題を扱う。従来の改宗研究の検討を通じて、改宗を宗教的信念と同一視するべきではないことを示す。更に、妖術を伝統宗教の一形態としてキリスト教と対置することによって、それを当事者にとっては確かに実在するものであるような、日常生活の中の脅威として捉えることが困難になるという点をも指摘する。

第 4 章においては、施術に代わる妖術への新たな対抗策としてのキリスト教に焦点を合わせる。改宗の経緯や祈りの効力に関するキリスト教徒達の語りを資料として、妖術、憑依霊、キリスト教が同一の地平において拮抗することを指摘する。ここで示されるのは、キリスト教が、実在する脅威としての妖術や憑依霊への対抗策として人々の人気を集めているという点である。その一方で、ドゥルマにとってのキリスト教徒となる過程は、単なる妖術への新たな対抗策の導入以上の意味を持つ。信徒達の語りを基に、宗教的信念の受容並びに自己変容をキリスト教徒となる過程と完全に切り離してはならないという点もまた、第 4 章において示される。第 5 章においては、悪魔崇拝者をめぐる語りを主な資料として、キリスト教と妖術言説の間の相互の影響について検討する。悪魔

崇拝者は、教会の活動を妨害するキリスト教徒の敵であると同時に、妖術使いの異型としても語られる。こうした悪魔崇拝者の像が、地域の共通の敵として妖術使いを捉える近年の傾向と結びつき、妖術使いの殺害を正当化する。この章においては、悪魔崇拝者と妖術使いの像が、この暴力正当化の論理を支えていることをも指摘する。

第 6 章においては、キリスト教が憑依霊観念に及ぼした影響に焦点を合わせる。非信徒の間では憑依霊が脅威であると同時に守護者ともなり得る存在として語られる一方で、キリスト教徒達は、憑依霊が専ら有害な存在であるばかりでなく教会の活動を妨げる神の敵である点を強調する。。キリスト教が憑依霊観念にもたらした変化として指摘されるのは、憑依霊を神の敵とする新たな語り口がキリスト教徒達の間で生じているという点である。第 7 章においては、妖術が当事者にとっての可能な出来事と不可能な出来事の境界に位置する存在であるとした上で、その境界に、教会の建設や学費の援助を行う海外のスポンサーを、悪意ある外国人や都市部の富裕層としての悪魔崇拝者の鏡像として捉え得ることを示す。

第 5 章以下の 3 つの章においては、霊的脅威との対立の図式にキリスト教が引き起こした変容についても検討する。第 5 章においては、教会の活動を妨害する偽のキリスト教徒としての悪魔崇拝者が、キリスト教の内部の敵として人々に懸念されていることを示す。第 6 章においては、非キリスト教徒の間では病気を引き起こす一方で守護者ともなり得るとされていた憑依霊が、キリスト教徒の間では専ら有害であるばかりでなく悪魔崇拝者と同様に教会の活動を妨げる神の敵として捉えられることを示す。第 7 章においては、悪魔崇拝者並びにその鏡像としてのスポンサーが示すような、外国人像の備える対極の性質の双方にキリスト教が関わることを示す。これらの 3 つの章においては、悪魔崇拝者、憑依霊、外国人像の観念との接触を通じて、キリスト教が霊的脅威との対立図式に新たな要素を付け加えつつあることもまた明らかにされる。

ここまでの議論を元に、本研究の結論において、改宗過程の把握の際に考慮すべき方法上の問題を検討する。まず、伝統宗教と世界宗教の対置並びに改宗と宗教の受容の同一視によって、妖術や憑依霊への対抗策としてキリスト教が受容されるというドゥルマの状況が歪曲されかねない点を指摘する。更に、妖術とモダニティの関連に注目する解釈が十分な根拠を持たないことを示す。これらの方法上の問題の確認を経て、霊的脅威との対立の図式がキリスト教徒達の間でいかなる変容を遂げたかという点について、再度検討を加える。キリスト教徒となることによって、ドゥルマの人々は神の敵としての悪魔崇拝者や憑依霊と対峙することとなる。キリスト教徒達の間では、悪魔崇拝者は信徒の中に紛れ込む教会内部の敵であると同時に、非信徒をも脅かす妖術にも似た存在として把握される。憑依霊はその守護者としての性質を剥奪されると共に教会の活動を妨害する神の敵としての存在を新たに付与される。最後に、ドゥルマにとってのキリスト教徒となる経験を描きだすことが、改宗過程を捉えるための、より歪みの少ない視座の開拓に通じることを指摘する。